

「千と千尋の神隠し」英語吹き替え版に見る英語コミュニケーション法
内野泰子（早稲田大学）

I. 本研究の背景情報

1. 米国における日本製アニメ事情の変遷

本研究では、米国で公開時に高い評価を得た宮崎駿監督の「千と千尋の神隠し」（英語タイトル“*Spirited Away*”）英語吹き替え版において、この作品を米国の一般観客にとって分かりやすくするためにどのような英語コミュニケーション法がとられているのかを中心に検証することを目的とするが、本論に入る前にまず背景情報として、米国において日本製アニメ英語吹き替え版がどのように扱われてきたのか、その変遷を概説したい。

米国において日本製アニメの英語吹き替え版が初めて劇場公開されたのは 1961 年の「白蛇伝」（同“*Panda and Magic Serpent*”）、初めてテレビ放映されたのは 1963 年の「鉄腕アトム」（同“*Astro Boy*”）であった。（津堅、2004）しかしながら、1980 年代末に至るまでの約 30 年間、米国における日本製アニメの英語吹き替え版では、テレビ放映用・劇場上映用の如何にかかわらず、作品自体に大幅な編集・削除・統合が施されるのが常で、「宇宙戦艦ヤマト」（同“*Star Blazers*”）などのヒット作品に関しても米国の観客はこれが日本製アニメであることすら認識せず視聴していたことが多かったと言われる。約 30 年間にわたり、日本製アニメについては、日本人の登場人物を米国人に置き換えたり、複雑な筋立てを単純化したり、文化的に分かりにくい部分や米国の放送コードに触れる暴力シーンなどを大幅にカットするといったことがごく普通に行われていたのである。例えば、1986 年に米国で劇場公開された宮崎アニメ「風の谷のナウシカ」（同“*Warriors of Wind*”）では、米国人にとって分かりにくいと見なされた部分やストーリー展開が遅い部分などが大幅にカットされ、上映時間はオリジナルの 116 分から 95 分に短縮されて物語の組み立て自体も損なわれる結果となった。（草薙、2003）また、米国においてはこの 30 年間、日本製アニメの日本語オリジナルの台詞と英語吹き替えとの乖離が問題視されることはほとんど皆無だった。

しかし、1990 年代に入ると、“AKIRA”や一連の宮崎作品等、一部の日本製アニメの芸術性が米国でも高く評価されるようになり、日本製アニメ全般の米国における地位が大きく向上した。また、家庭用 VCR の普及で米国内の英日バイリンガルのアニメ・ファンが日本語オリジナル版をビデオ鑑賞できるようになり日本語オリジナルとの乖離を認識するようになったこと、また、インターネットの普及でそうしたオリジナルと吹き替え版との違いをめぐる問題についての意見交換がネット上で広く行われるようになったことなども相俟って、米国内の熱心な日本アニメ・ファンの間には日本語オリジナル版に編集を加えないことや日本語オリジナルの台詞にできるだけ忠実な英語吹き替えを付けることを求める気運が高まりを見るようになった。最近では、下記の Poitras の指摘にあるように、「セーラー・ムーン」（同“*Sailor Moon*”）や「もののけ姫」（同“*Princess Mononoke*”）などの人気作品については、吹き替え版ビデオ

が市販されているにもかかわらず、日本語オリジナル版に忠実な英語字幕“fansub”（ただし、こうした字幕は著作権違反行為と見なされている）を自ら作成し配布するファン・クラブも多数登場してきている。

“In the 1990s clubs moved beyond organized screenings and conventions. Some began to produce their own, illegal, subtitled versions of anime.”

(Poitras, 2001)

2. 「千と千尋の神隠し」英語吹き替え版に対する評価

宮崎監督の「千と千尋の神隠し」は 2001 年に日本で公開され、日本の映画史上空前の観客動員数を記録したが、北米（カナダを含む）では翌 2002 年 9 月から吹き替え・字幕両版が Disney 社により限定上映（最高時 151 館）された。その後、同作品がアカデミー長編アニメーション賞を受賞すると、北米 800 館で凱旋再上映が行われた。同作品の北米上映で注目すべきは、その英語タイトルが“*Miyazaki's Spirited Away*”と同監督の名を冠したものとなった点である。これは同監督作品の芸術性に対する国際的評価が高まったことや上述したように米国内で日本製アニメ全般の地位が大幅に向上したことを反映して、前述した“*Warriors of Wind*”の場合のような大幅カットや改変を加えていないオリジナル・フィルムそのままの公開であることを強調するためと言われる。また、吹き替えに関しても、宮崎監督と親交の深い John Lasseter 監督の協力を得て、これまでの日本製アニメの英語吹き替えと比較して格段に高い評価を受ける結果となった。下記はメディアに登場したそうした評価の一部である。なお、この作品の北米公開に際しての Lasseter の協力ぶりは DVD「ラセターさんありがとう」で詳しく示されている。

○ Roger Ebert, *Chicago Sun-Times* (September 20, 2002)

“It has been flawlessly dubbed into English by John Lasseter.”

○ *SFGate.com* (September 20, 2002)

“Disney Studios, spotting a cultural crossover possibility, took the Japanese version ‘Spirited Away’ and gave it an English-language makeover. The result is a lovely evocative tour de force.”

○ Michael Wilmington, *Metromix.com* (July 19, 2004)

“--- this English-language is the most thorough translation yet. The executive producer is John Lasseter, the director Kirk Wise, and they’ve redubbed the dialogue carefully, making the American speeches match the original Japanese lip movements.”

3. 「千と千尋の神隠し」吹き替え版台本作成方法

次に、このように米国内で好評を博した英語吹き替え版の台本が実際にはどのような方法で作成されたのかについて言及したい。上記の映画評論の中には Lasseter 自身が translation を行ったかのような誤解を招きかねない記述も見られるが、英語吹

き替え版の台本を実際に作成したのは Cindy Hewitt・Donald Hewitt というシナリオライター夫妻である。 *Animation World Magazine* に掲載された Hewitt 夫妻へのインタビューによると、以下引用部分の下線箇所にあるように、同夫妻は日本語を解さないが、すでに作成されていた劇場上映用英語字幕と日本語オリジナル台本からの直訳英語バージョンをつき合わせて、やはり日本語をほとんど解さない Lassetter に相談しながら、日本文化の理解等よりも米国の観客に複雑なストーリーを分かり易く伝えること、また自然な英語の台詞にすることに重点を置いて英語吹き替え版台本を作成した。 Jakobson(2000)は、translation を“intralingual translation”(an interpretation of verbal signs by means of other signs of the same language)、“interlingual translation”(an interpretation of verbal signs by means of some other language)、“intersemiotic translation”(an interpretation of verbal signs by means of signs of non-verbal sign systems)に3分類しているが、この作品の吹き替え台本は、日本文化や宮崎作品などへの理解・造詣が深い熱心な日本アニメ・ファンを主たる観客と想定したと思われる字幕版を今度は一般観客向けに書き下した英語から英語への“intralingual translation”と言えよう。

Animation World Magazine (September 26, 2002)掲載インタビューの抜粋

[<http://www.awn.com/mag/>] (CH は Cindy Hewitt, DH は Donald Hewitt を指す。)

Q: How did you translate this film?

CH: (前略) We watched the film with subtitles and were also given a direct translation, which was much choppy. (中略) ---we were really trying to just say, “Here’s the film. We’re an American audience. What don’t we get?”

DH: We just wanted to make it sound good and as understandable as possible to us as Americans. Not necessarily having to understand Japanese culture to “get it,”but just set the simple logic of the movie.(中略)---He (Lassetter) would make a few minor suggestions here and there, but he was in support of us, trying to make it as clear as possible.

II. 「千と千尋の神隠し」吹き替え版台本の英語コミュニケーション法分析

1. 分析の目的と意義

本研究では、こうした“intralingual translation”の過程で米国の一般的観客への分かり易さと英語としての自然さを実現するためにどのような方法がとられたかを探ることを目的とした。本研究の結果は、日本人学生に英語コミュニケーション法と日本語コミュニケーション法の差異を具体的に示す上でも役立つものになるのではないかと想定した。

2. 分析対象

上記の目的で行う本研究は、本来、英語吹き替え版台本作成版のベースとなった劇場公開用英語字幕と日本語からの直訳バージョンを入手しこれら2つと吹き替え版をつき合わせて比較すべきであったが、劇場用字幕・直訳版とも非公開で入手不可能で

あったため、劇場用字幕の代わりに後日発売された同作品 DVD 版の英語字幕、直訳版の代わりに日本語オリジナルを用いて、それらと英語吹き替え版台本との乖離を検討することにした。劇場公開版字幕と DVD 版字幕は、「ロード・オブ・ザ・リング」の日本語字幕の場合のように、劇場公開字幕に対する観客からの批判が余りにも大きく大幅な修正を余儀なくされた例もあるが、通常 DVD 版には劇場版より字数制限が多少緩い分を勘案して僅かな付加・修正が施される程度であるため、本研究では Hewitt 夫妻が“intralingual translation”のベースにした劇場公開用英語字幕は DVD 版英語字幕とほぼ同一と仮定した。

3. 分析方法

3.1 日本語オリジナルと英語字幕との比較

まず、吹き替え版作成のベースとなった DVD 版英語字幕と日本語オリジナル台本との間の乖離を分析した。ここでは、筆者が米国のラブコメディ 3 編の日本語字幕と吹き替えについて行った前回分析(内野、2002)で用いた“functional equivalence”(機能的等価)に基づく 6 項目のチェックリストを今回も利用した。Brannen・澤登(1989)は機能的等価を「ある言語表現が、特定の場面において、どのような発話意図を持って発せられたものであるかを把握して、それを受容言語の中で同じような機能を持った表現に変えていくこと」と定義し、機能的等価が実現されているかをチェックするための十数項目を指摘しているが、前回の分析同様、その中から字幕翻訳に密接に関係すると筆者が考える 6 項目(①文化面の誤解に起因した誤訳箇所はないか?②発話意図上重要な情報が切り捨てられていないか?③発話意図上重要な情報が脚色され過ぎていないか?④重要なニュアンスや含蓄が損なわれていないか?⑤明らかな意味の取り違えや専門用語、文法的解釈などの誤りがないか?⑥会話文として不自然なところはないか?)に関して全 822 枚の英語字幕を日本語オリジナル台本と比較しながら検討した。この結果、下記の<字幕実例 1>に示したように DVD 字幕のほとんどが日本語オリジナル中の情報をかなり忠実に再現したものであることが分かった。また、日本的事象についても直訳的に処理されている箇所が多かった。日本語オリジナル中の情報に改変が施された英語字幕数は全体の 1 割にも満たず、そうした改変も<字幕実例 2>に示したように字数面制約から生じる重要でない部分の省略や発話意図に影響を及ぼさない情報の一般化や付加・具体化といった程度のものであり、大きな脚色はほとんど見られなかった。機能的等価とは当然一定のものではなく、対象となる観客が持っている背景知識、作品や監督への傾倒度等によって変わってくるはずであるが、米国では外国映画の字幕上映は日本ほど普及しておらず、アート系以外の外国映画については吹き替え上映が一般的であるという事情を考慮に入れると、“Spirited Away”を字幕で見ようという観客の多くは熱心な日本製アニメ・ファンと想定される。従って、この作品の日本語オリジナルから英語字幕への“interlingual translation”は、前述した“fansub”と同様、後述するような日本製アニメの特殊性に馴染んでおり、宮崎アニメ中の短い台詞やサイレンスの持つ含意(implicature)をも理解するような“serious fans”向けの機能的等価をオリジナルへの忠実性を重視しながら実現しようとしたものと考えられる。

<字幕実例 1: オリジナル日本語に忠実な例>

(字幕 NO.60)

千尋:「エー、まだ行くの、お父さん、もう帰ろうよ」

What! Even farther! Let's go back, Daddy.

(字幕 NO.109)

ハク:「怖がるな、私はそなたの味方だ」

Don't be afraid. I'm your friend.

(字幕 NO.232)

湯バーバ:「八百万の神様が疲れを癒しにくるお湯屋なんだよ」

It's a bath house where 8 million gods can rest their weary bones.

(字幕 NO.483)

兄役:「その声は」

That voice.

<字幕実例 2: 情報改変例>

(字幕 NO.16)

母:「あの隅の青い家でしょう」

It must be that blue one over there. (重要性の低い情報の省略)

(字幕 NO.20)

母:「なあに、この建物」

What's this strange building? (機能的等価の範囲内での具体的情報の付加)

(字幕 NO.332)

ハク:「お食べ、ごはんをたべなかつたろう」(情報の一般化)

Go ahead, eat. You must be hungry.

3.2 字幕と吹き替え台本との比較

次に、こうした英語字幕を分かり易さと自然さを重視して作成された吹き替え版台本は字幕とどのように乖離しているのかを比較分析したが、ここでは同義語的な言い換えや語順の入れ替えなどは乖離とは見なさなかった。その結果、字幕全 822 枚中、吹き替えで字幕中の情報や表現が改変されていたものは 295 枚と約 36 パーセントに及び、それらの中には日本語オリジナルとの機能等価から逸脱しているものも相当数見受けられた。また、吹き替え版ではオリジナルならびに字幕にはない台詞が 9 箇所追加されていた。これら合計 304 箇所について、字幕と吹き替えの乖離がどのような性質のものであるかを考察した結果、これらを次の 12 グループ[(a)具体的説明の付加、(b)キャラクターの性格が明確になるような改変、(c)場面のつながりをよくしたり論理性を持たせたりするための改変、(d)キャラクターの感情が明示されるような改変、(e)伏線を示すような改変、(f)くだけた口語表現への改変、(g)情報の省略、(h)情報の一般化・単純化、(i)オリジナルならびに字幕では silence になっている部分への台詞追加、(j)日本の事象を分かり易くするための改変、(k)人間関係がはっきりするような改変、(l)欧米的な概念や慣習への転換]に分類することを試みた。それぞれのグループの代表

的な実例を以下に日本語オリジナル、英語字幕、英語吹き替えの順に並べて示すが、Sは字幕(subtitle)、D(dubbing)は吹き替えを指す。なお、これらの実例を見ると、前項に記したように英語字幕は日本語オリジナルに極めて忠実に作成されていることが明らかである。

(a) 具体的説明の付加 (110箇所)

(字幕 NO.10)

母：「アラッ、この前のお誕生日にバラの花もらったじゃない」

(S)What about that rose you got for your birthday?

(D)Daddy bought you a rose on your birthday. Don't you remember?

(日本語オリジナルにない「お父さんが買ってくれた」という具体的情報を加えている)

(字幕 NO.101)

千尋：「お父さん帰ろう、お父さん」

(S)Daddy, let's go home. Let's go, Daddy!

(D)Dad, quit eating. Let's get out of here.

(日本語にはない「食べるのをやめる」という具体的行為が付け加えられている)

(字幕 NO.149)

ハク：「中にカマジイという人がいるから、カマジイに会うんだ」

(S)Kamaji's there, so look for him.

(D)There, you'll see Kamajii, the boilerman.

(日本語では「カマジイ」という名から仕事を連想できるが、英語では無理なため、「ボイラーマン」であることを明示している)

(字幕 NO.251)

湯バーバ：「大きい声出すんじゃないよ」

(S)Shut up!

(D)Quiet down. You've scared the baby.

(日本語にはない大声が及ぼした具体的影響を明示している)

(b) キャラクターの性格が明確になるような改変 (46箇所)

(字幕 NO.201)

リン：「やなこった、おねえ様方に頼まれたんだよ」

(S)Not a chance. It's for other girls.

(D)No way, frog. I'm serving every last bite for myself.

(威勢のいい湯女リンの性質を際立たせる吹き替え台詞だが、吹き替えではここで話題になっている「イモリの黒焼き」をリンが食べる意味になっており、オリジナルとの機能的等価を逸脱している)

(字幕 NO.211)

蛙人：「到着でございます」

(S)Here we are.

(D)Step up to the right, gentlemen.

(湯屋の入り口で出迎える使用人らしい吹き替えとなっているが、これも機能的等価を逸脱した脚色となっている)

(字幕 NO.336)

ハク：「ひとりでもどれるね」

(S)Can you find your way back?

(D)I've got to go. I'll be back soon to help you. Just stay out of trouble.

(千尋のことを心配するハクの発言に、日本語にはない詳しい情報や指示が加えられており、一見冷たく見えるハクが実は千尋に対して優しい気持ちを持っていることを示している)

(c)場面の前後関係のつながりをよくしたり、論理性を持たせたりするための改変(39箇所)

(字幕 NO.258)

湯バーバ：「そのかわりにイヤだとか帰りたいたか言ったらすぐに仔豚にしてやるからな」

(S)But one peep out of you about anything, and I'll turn you right into a piglet.

(D)If I hear one little complaints of you, You'll be joining your parents in the pigpen.

(すでに両親が豚にされたこととつながるように情報を改変している)

(字幕 NO.422)

父役：「ああ、汚い手で壁をさわっておって」

(S)Oh, no, soiling the wall with these filthy hands.

(D)What! She's gonna waste our good water.

(水で風呂桶を掃除している場面であるが、吹き替えでは日本語とは全く乖離した水の話に置き換えられており、機能的等価を逸脱している)

(d)キャラクターの感情が明示されるような改変 (24箇所)

(字幕 NO.254)

千尋：「ハタラカセテクダサイ」

(S)Please let me work.

(D)I'm not leaving until you give me a job.

(湯屋でどうしても働きたいという千尋の気持ちが吹き替えでは明示されている)

(字幕 NO.317)

千尋：「お父さん、お母さん、わたしよ、センよ」

(S)Daddy, Mommy, it's me. It's Sen.

(D)Mom, Dad? Are you all right? It's me, Sen. Wake up!

(両親を心配する気持ちを明示する情報が吹き替えでは付加されている)

(字幕 NO.488)

千尋：「ここからお父さんたちのとこ見えるんだ」

(S)I can see where Mom and Dad are from here.

(D)There's Mom and Dad's pigpen. I surely hope they're all right.

(同上の気持ちの明示)

(字幕 NO.510)

千尋：「どうしよう、ハクが死んじゃう」

(S)Oh, no! He'll die.

(D)I've got to get there before he bleeds to die.

(ハクを心配する気持ちとそのために必要な行動を明示するための脚色)

(e)伏線を示すような改変 (20 箇所)

(字幕 NO.35)

千尋：「風を吸い込んでいる」

(S)The wind is going in.

(D)The wind is pulling us in.

(これから不思議な世界に引き込まれて行くことを暗示するような脚色)

(字幕 321)

ハク：「人間だったことは今は忘れてる」

(S)They don't even remember being human.

(D)They don't even remember being human. So look hard. It's up to you to remember which ones they are.

(千尋はエンディング場面で多くの豚の中から両親を識別するという難題を課せられるが、その伏線となる情報を早くから示している。機能的等価を大きく超えた脚色)

(字幕 NO.723)

ゼニーバ：「さっ、お座り。お前はカオナシだね、お前もお座りな」

(S)You sit, too. You're NoFace, aren't you? You sit, too.

(D)What happened to my spell? Only love can break it. Come over.

(エンディングで愛の力で魔法がとけることを暗示する機能的等価を超えた脚色。日本語オリジナルに相当する部分は“Come over.”と省略されている)

(f)くだけた口語的表現への改変 (16 箇所)

(字幕 NO.6)

千尋：「前の方がいいもん」

(S)I like my old school.

(D)It's a kind of stink. I like my old school.

(転校先の学校が気に入らないことを口語的表現で付加)

(字幕 NO.384)

千尋：「わーすごい色」

(S)Look at that color.

(D)What's in this water? Yuck! (子供がよく使う口語表現を付加)

(字幕 NO.520)

兄役：「何をしておる、はよどけ」

(S)Don't just stand there.

(D)Don't talk to him. You stinky. (俗語的表現を付加)

(g)情報の省略 (12 箇所)

(字幕 NO.144)

ハク：「この世界で生き延びるためにはそうするしかないんだ。 ご両親を助けるためにも」

(S)You have no choice if you want to survive here. And save your parents, too.

(D)You don't have any choice if you want to help your parents. This is what you have to do.

(字幕版にある下線部分が省かれ、両親を助けるという目的に焦点が合わせられている)

(字幕 NO.380)

湯バーバ：「それを調べるんだ、今日はハクがいないからね」

(S)You figure it out. Haku's out today.

(D)I'm not quite sure. Figure it out and report back.

(同様に、最も重要な情報を強調する吹き替えとなっている)

(h)情報の単純化・一般化 (11 箇所)

(字幕 NO.235)

湯バーバ：「おまえももとの世界にはもどれないよ」

(S)And you'll never see your world again, either.

(D)And you should be punished.

(日本語オリジナルでは人間世界には戻れないことを意味しているが、「罰せられる」という一般的な表現に改変されている)

(字幕 NO.246)

湯バーバ：「ぜいたくな名だね」

(S)What an extravagant name!

(D)What a pretty name!

(湯バーバが「千尋」という名を贅沢だとして「千」に変えてしまうという重要部分だが、漢字が分からないと意味をなさないの、吹き替えでは上記のように単純化されている)

(i)オリジナルならびに字幕ではサイレンスになっている部分への台詞の追加 (9 箇所)

(便宜上、字幕との通し番号とする)

(NO.93) 千尋: It's a bathhouse.

(千尋が初めて湯屋を見た場面で、オリジナルでは何も台詞はないが、映像で建物

を見ても何であるか分からないであろう一般の米国人向けにこの台詞が付されている)

(NO.340) Haku. He's a dragon.

(ハクが竜に変身したことを推測するのが難しい米国人向けに付された台詞)

(NO.830) (N.831)

父: New house and new school. Is it a bit scary?

千尋: I think I can handle it.

(千尋一家が元の世界に戻り車に乗って去っていくエンディング部分であるが、日本語オリジナルでは「千尋、早くしなさい」(字幕 NO.829: “Hurry up, Chihiro.”/ 吹き替えでは“Don't be afraid, honey. Everything is gonna all right.”と脚色)という母親の言葉が台詞としては最後で、そのあと少しサイレンスがあって終わっているが、これでは“coda”としての終結感に乏しいため、吹き替え版ではこのサイレンス部分が上記の2つの台詞に置き換えられている)

(j) 日本的事象を分かりやすくするための改変(8箇所)

(字幕 NO.232)

湯バーバ: 「八百万の神様達が疲れを癒しに来るお湯屋なんだよ」

(S)It's a bath house where 8 million gods can rest their weary bones.

(D)It's a bath house for spirits. It's where they come to replenish themselves.

(「八百万」という日本の神々に付された表現は分かり易くするために省略されている)

(字幕 NO.385)

リン: 「こいつにはさ、みみずの干物が入ってるんだよ」

(S)That's the dried worm.

(D)Dried worm salt. It's supposed to be good for you.

(オリジナルで「干物」とある箇所を欧米人が風呂によく入れる“bath salt”として表現するとともに、その効用も付加)

(字幕 NO.765)

ハク: 「ありがとう、私の本当の名はニギハヤミ・コハクヌシだ」

(S)Chihiro, thank you. My real name is Nigihayami Kohakunushi.

(D)You did it, Chihiro. I remember. I was the spirit of the Kalaku River.

(日本語オリジナルで出てくる名前では米国の一般観客に分かりにくいので、その実態が

分かるような吹き替えになっている。「コハク」も種族名などで英語にも登場する“Kalaku”に変えられている。

(k) 人間関係がよりはっきりするような改変 (6箇所)

(字幕 NO.543)

坊: 「行ったら泣いちゃうぞ、坊が泣いたらすぐバーバが来て、お前なんか殺しちゃうぞ」

(S)If you go, I'll start crying. If I cry, Baba will come and kill you.

(D)If you go, I'll cry. And mama will hear and will come in here and kill you.

(湯バーバが実は坊の母親であることが分かり易くされている)

(字幕 NO.690)

湯バーバ：「ずいぶん生意気な口をきくね。いつからそんなにえらくなったんだい」

(S)You've gotten pretty fresh. Since when, do you talk that way?

(D)Don't get fresh with me, young man, since you talk that way to your master.

(湯バーバがハクに向かって言った台詞だが、ハクは湯バーバの手下であることを明示)

(1)欧米的な概念や慣習への転換 (3箇所)

(字幕 NO.64)

母：「気持ちいいとこねえ、車の中のサンドイッチを持ってくればよかった」

(S)What a lovely spot. We should've brought our lunch with us.

(D)Oh, what a beautiful place. We should have brought lunch. Then, we could have a picnic.

(戸外で食事をする“picnic”という米国人に馴染みの深い表現を付加)

(字幕 NO.270)

湯バーバ：「今日からその子が働くよ。世話をしな」

(S)This child's starting to work as of now. Look after her.

(D)This girl signed a contract. Set her up with a job.

(吹き替えでは「契約」という米国社会に浸透した行為に置き換えて表現)

III. まとめ---分析結果の総括と英語コミュニケーション教育への適用

1. 吹き替え版分析結果についての総括

日本製アニメは、その国際的評価の高まりに伴い、Napier(2000)著の“*Anime from Akira to Princess Mononoke*”に代表されるように米国では学術研究の対象としても注目され始めているが、Napierは“*The Asahi Shimbun*”掲載記事の中で、日本製アニメの人気の原因はその特殊性にあると次のように分析している。

“It's different. (中略)---more exciting, more beautiful, more sophisticated, more interesting, more original, often darker and more adult.---(後略).”(April 23, 2005)

また、米国で発行された日本製アニメ解説本 3 書 [Drazen(2003), Lent(2001), Poitras(2001)]でも、日本製アニメ人気は下記のような特殊性が原因と指摘されている。

<日本製アニメ解説書で指摘された特殊性>

○ ストーリーの結末が見えないところ。

- キャラクターの性格づけが複雑。(ヒーローにも悪い性質が潜んでいたりする)
- happy ending とはかぎらず、主役が死ぬなどの暗い話も登場。
- キャラクターの感情が台詞ではなく行動や態度で細やかに示されることが多い。
- 日本文化を楽しむことができる。
- 種々の映画的技法が取り入れられた高度で美しい画面を楽しめる。
- キャラクターの髪(しばしば緑やピンク)や目の色、容貌などが特定の国籍や民族を超越している。
- 米国製アニメには見られない violence, nudity, sexual content を楽しめる。
- 日本独特のボディ・トーク(ストレス時にこめかみにバツ印が出たり性的に興奮すると鼻血が出たりする) を楽しめる。

日本製アニメの熱心なファンはこうした特殊性故に日本製アニメを愛好している訳だが、上記のような特殊性の多くは一般の米国人観客にとって作品の理解を阻む要因となる可能性が高い。「千と千尋の神隠し」英語吹き替え版に置く“intralingual translation”では、こうした特殊性から生じた分りにくさを解消するために、具体的説明を加えたり、キャラクターの性格・感情・人間関係などを分かり易くしたり、複雑なストーリーを観客がフォローしやすくするために伏線的情報を前もって台詞の中に盛り込んだり、ストーリーに論理性を持たせるように台詞に改変や再構成したり、情報の省略・一般化・単純化を施すといった工夫が見られた。また、オリジナル中のサイレンス部分もストーリーを分かり易くするための台詞を追加するために利用されることがあった。

日本語版オリジナルは、佐々木(2003)が述べるように「物語がなぜこのように展開するのか、話の中でできごとにはどんな意味があるのか、そこから語りかけてくるものは何か」について日本人でも解説が必要な部分もあるが、英語吹き替え版では上記のような改変が施されたため、台本作成者の Donald Hewitt が前出のインタビューの中で次のように述べているように、米国の一般的な観客にとってだけではなく日本人観客によっても分かり易いものとなっている。

“I ran into a Japanese reporter and she said she actually understood some things watching this version that she didn’t understand in the Japanese.”

しかし、分かり易さを実現することに成功した反面、宮崎作品の難解さや特殊性が損なわれてしまったため、フィルムはノー・カットであるにもかかわらず本来の宮崎作品ではなくなってしまうと嘆く熱心な日本製アニメ・ファンの声もあった。映画ファン・サイト (XIXAX.COM) に掲載された次のコメントはその一例である。

“The English language dubbing is, to put mildly, a travesty that destroys all the magic and power in ambiguity the original Japanese version had. This version does not allow the scenes to play out in the silence of the characters doing what they are doing as in some scenes, but jams itself with dialogues---(中略).

All mystery is lost in it and in this version everything is explained so audience will 'get' it---(後略).” (ハンドル・ネーム“The Gold Trumpet”からの投稿)

また、一部には日本語オリジナルとの機能的等価を著しく逸脱した脚色も見られた。

最近では、「日本製アニメは世界市場の約 65 パーセントを席捲している」、「米国のテレビでは年間約 40 本もの日本製アニメが放映されている」、「米国の映画会社が日本製アニメの配給権を作品完成前に契約したがるケースが出てきている」、「宮崎アニメ新作が世界上映される」等、米国をはじめとする海外市場での日本製アニメの興隆ぶりを伝えるニュースを多く目にするが、どのような英語吹き替えが施されているのか、あるいは、オリジナルとの乖離は妥当な程度のものかといった「言葉」の部分についての議論は日本国内ではあまり行われていないのが現状である。日本文学作品の英語翻訳版については、日本語オリジナルとの「ずれ」といった問題が広く論じられてきたが、伝達媒体として絵が大きな部分を占めるアニメーションについては、吹き替え翻訳における日本語オリジナルとの「ずれ」に対する認識や理解がアニメ製作者自身ですら低いことが下記の手塚(1997)の発言からうかがえる。

「アニメーションは、声を英語やフランス語に直してしまうと、その国の言葉でやることになりますから、完全にその国の人たちがわかってくれます。したがって、あとはテーマとか情緒を工夫して、インターナショナルなものをつくれれば、日本のアニメが外国に通用するのです。」

日本製アニメが日本の代表的ポップ・カルチャーとして海外で人気を博す今、アニメの「言葉」の部分が海外でどのように伝えられているのかについて日本国内でもさらに注目していく必要があるのではないかと考える。

2. 英語コミュニケーション教育への適用

「千と千尋の神隠し」吹き替え版の“intralingual translation”の中で、英語コミュニケーション教育への適用という観点から特に注目に値すると考えるのは、具体的説明の付加、キャラクターの感情が明示されるような改変、よりくだけた口語的表現への改変の3点である。Baker(1992)は、翻訳を行ううえで“pragmatics equivalence”(語用論的等価)の実現を重要視した。これは、Grice(1975)が唱えた“maxims of conversation”[協力的な会話を行うためには、適切な情報量を提供する(Quantity)、正しいことを述べる(Quality)、当該の会話に適切に関連したことを述べる(Relevance)、相手が理解できるような話し方をする(Manner)という4つのルールを守ることが本来必要で、これらが破られる場合にはユーモア、叱責など特殊な含意を持つ]に基づき、source language の含意を target language でも忠実に再現することを重視する考え方である。例えば、日本語においては控え目に感情を表現するのが Quantity、Manner 双方の面からごく一般的であると考え、感情をより明確に示すのが一般的な英語に翻訳する場合には情報の付加が必要になり、そうしないと本来とは異なる含意が生じてしまうことになる。千尋が両親を思う気持ちが日本語オリジナルでは「ここからお父さんた

ちのどこ見えるんだ」という抑えた台詞で表現されているが、そのままの情報量で示した字幕の“I can see where Mom and Dad are from here.”よりも千尋の気持ちを明示した情報を加えた吹き替えの“‘There’s Mom and Dad’s pigpen. I surely hope they’re all right.’”の方がこの日本語の台詞の含意を明確に伝えており、語用論的等価性が高いことになる。また、小学生である千尋の話し方（Manner）を英語の台詞に移し変えるには、米国の小学生がいかにも使いそうな話し方に改変しないと、やはりオリジナルとは異なる含意を示してしまう可能性がある。

最近では、語用論的な観点から日本語と英語のコミュニケーション法の違いに言及した英語教材もいくつか登場してきており、「(英語で)何か誉める時には、一言ではなく二言で誉めると、相手にあなたの気持ちがもっと伝わります」(大谷・村田・重光、2004)といったように日本語と英語の適切な情報量の違い等についての指導も盛り込まれるようになってきているが、「千と千尋の神隠し」吹き替え版は、こうした指導を行ううえでの具体的なヒントも提供してくれるものとする。

(参考文献)

- Baker, M, 1992, *In Other Words: A Coursebook on Translation*, Routledge
Drazen, Patrick, 2003, *Anime Explosion!*, SBP
Grice, H.P, 1975, *Logic and conversation*, in *Syntax and Semantics* edited by Cole, P and Morgan, J.L.
Jakobson, R., 1959 / 2000, *On linguistic aspects of translation*, in *Translation Studies Reader*, edited by Venuti, L., Routledge
Lent, John A., 2001, *Animation in Asia and the Pacific*, Indiana University Press
Napier, Susan J, 2000, *Anime from Akira to Princess Mononoke*, PALGRAVE
Napier, Susan J, April 23, 2003, ‘Spirited Away’ presages golden age of anime, *The Asahi Shimbun*
Poitras, Gilles, 2001, *Anime Essentials*, Stone Bridge Press
Brannen, N., 澤登春仁、1989、「コミュニケーションとしての翻訳---機能的翻訳のすすめ」、バベル・プレス
草薙聡志、2003、「アメリカで日本のアニメはどう見られてきたのか？」 徳間書店
大谷・村田・重光、2004、「Let’s be friends!---Strategies for Successful Communication」、MACMILLAN LANGUAGEHOUSE
佐々木隆、2003、「千と千尋の神隠し」のことばと謎、国書刊行会
手塚治虫、1997、「ぼくのマンガ人生」、岩波新書
津堅伸之、2004、「日本アニメーションの力：85年の歴史を貫く2つの軸」、NTT出版
内野泰子、2003、「洋画の日本語字幕に見るコミュニケーション法---最近の字幕批判をめぐって」、THE JASEC BULLETIN Vol.12

(日本語台本)

- スタジオジブリ、2001、「The Art of Spirited Away」、徳間書店

(ビデオ・DVD 等)

“Miyazaki's Spirited Away”, Walt Disney Studio (英語吹替え版)

「千と千尋の神隠し」、スタジオジブリ、ブエナビスタホームエンターテイメント(日本語オリジナル・英語字幕)

「ラセターさん、ありがとう」、スタジオジブリ、ブエナビスタエンターテイメント
(「千と千尋の神隠し」米国公開時のドキュメンタリー)